

学燈 gakutou

【創刊号】



山口大学教職大学院始動！

平成 28 年春、山口大学教職大学院は産声を上げました。日々激しい変化の中にある現代にあって、子供たちのより良い成長のために、そして山口県の教育に新たな風を吹かせるために院生・教員一同励んでいます。

一生懸命勉強している我々一人ひとりが灯す「小さな学びの光」が、「子供たちの未来を照らす光」となり、次代の山口県教育に貢献する皆さんの「目印の灯」の一つとなれますように、との願いをこめてこの山口大学教職大学院ニュースレター「学燈（がくとう）」を創刊します。

教職大学院ニュースレター発刊に向けて

教育学研究科長 岡村康夫

「教職大学院ニュースレター」発刊に際し、一言挨拶を申し上げます。本年度から国立大学法人は第三期中期目標・計画期間に入ります。法人化以来、国立大学は 6 年ごとの中期目標・計画を立て、それに沿った独自の教育、研究さらには地域貢献を推進することを求められています。そのなかでも特に教育学部は「地域密接型」の学部としてこれまで以上に県や市町の教育委員会および学校現場と連携して、教員養成のみならず、山口県の教員の資質能力の向上に寄与することが必要です。また今後、中央教育審議会答申に拠りますと、大学と教育委員会とは「教員育成指標」を共有し、さらに養成・採用・研修の一体化を推し進めることとなると思います。

本学におきましても、このような目標・計画の実現を目指して、平成 25 年度の大学の「ミッションの再定義」以来の流れの中で、これまで平成 27 年度には学部改組（教員養成特化）、平成 28 年度には教職大学院設置と進めて参りました。いずれも文部科学省主導の強力な改革推進の一貫であると言わざるをえない側面があります。ただ、制度あるいは枠組みはこのように変革されてきていますが、これからその内実が問われる段階に入ります。学校教育現場の課題は多岐に亘り、教員一人一人の資質能力の向上はもちろんのこと、「チーム学校」という言葉が象徴するように、教育現場を支える体制作りが急務とされています。山口県では全国に先駆け、「山口県教員養成等検討協議会」を立ち上げ、また「コミュニティ・スクール」の設置を進めて、教育現場の諸課題に応える方向を明確に打ち出しています。本学の教職大学院もその一角を占める重要な責務を担っていると自負しています。

ところで、この間、大学は「現場第一」という言葉を文部科学省や教育委員会等から突き付けられて来ました。今後、大学が「いかなる立ち位置」において、この問いに答えるかが問われることと思います。確かに、現場の課題は現場に入ることによってしか解決の糸口を見つけないということも真実です。ただ、逆にそれが結果として現場に埋没することになっては何かを見つけれられたとしても、それは「対処療法的な解」でしかないということもあり得ます。我々は現場との往還を繰り返すなかで、「より普遍的な解」を求める必要があります。そういう意味で、「現場との連携と棲み分け」とにおいて、大学、特に教職大学院の果たす役割はますます重要となると思います。以上、簡単ですが、教職大学院設置の経緯とその使命について申し上げて、本ニュースレター発刊の挨拶に代えさせていただきます。

(平成 28 年 初秋)

なぜ、今、教職大学院なのか

教育学部副学部長 和泉 研二

学校現場では、日々様々な問題が生じるだけでなく、学ぶ意欲の低下・規範意識や自律心の低下・社会性の不足・いじめや不登校など一朝一夕には解決し難い問題も抱えています。時には、学校の機能が停止するような重大な危機に直面したりすることもあります。それらの解決には、教員個人の力だけでなく、学校が組織的に取り組むことや、保護者や地域住民、教育委員会など関係機関との連携も必要となります。それらの諸課題の解決を目指し、その中心となって適切に対処できる力こそが、専門職としての教員に求められる資質能力です。

では、そのような資質能力を備えるには、どうすればよいのでしょうか。それにはまず、現場を知ることが何よりも重要です。学校において現場での仕事に従事しながら、管理職や先輩教員から教職に必要な知識・技能・態度を学んでいく過程（On the Job Training、OJT）を抜きにして、教員の成長は望めません。

一方、現場で起こっている目の前の現象のみにとらわれ、方向性や論理性を見失い、場当たりの対応のみを繰り返すような教員では、心もとない限りです。多くの先行研究や事例研究に支えられた理論から学び、理論と照らし合わせながら、解決していくことが求められます。そのためには、多忙な学校現場から一步離れた次元から現場の諸問題を捉え最適な解決法を探っていく学びの過程（Off the Job Training、Off-JT）も重要とされています。

私たちは、真に現場の課題解決に資する実践力を備えた教員を育成するためには、OJT と Off-JT を往還し、実践と省察とを繰り返し成長すること、つまり現場での OJT と大学での Off-JT を融合させた状態で自己発展（On the Job Development（OJD））できるシステムが、最も効果的な教員養成システムと考えます。現在、それを実現できるのは教職大学院のみです。

教員の大量退職の時代を迎えた今、特に実践力に優れたミドルリーダーと若手教員の養成が急務ともなっています。そこで山口大学では、山口県教育委員会、各市町教育委員会ならびに地域の拠点校等と連携しながら、現職教員ならびに学部新卒者に対し、OJD による教員養成が可能なシステムを持つ教職大学院を設置しました。

教職大学院は、中央教育審議会の答申においても、「高度専門職業人としての教員養成モデルから、その中心に位置付けること」とされています。教職大学院の役割は、今後ますます重要なものになっていくでしょう。

山口大学教職大学院の特徴

教育実践高度化専攻長 佐々木 司

山口大学の教職大学院は「コミュニティ拠点方式」を採用しています。これは、学生が個人として成長したり、原籍校や実習校に利益をもたらしたりすることにとどまらず、より広範な学校や先生方、教育関係者に望ましい影響を及ぼす有為な人材に成長してもらうことを願った上で導入した制度です。山口大学は県内の教員養成系大学の中心的存在として県内にネットワークを構築していますが、教職大学院はその中核を担う存在です。教員も、県内各地の教育機関等に出向き、学生の指導を通じて広く山口県教育の発展に貢献してまいります。専門職大学院の学びは、「現場」や「実践」を重視しています。ただし、現場で起こっている事象にとらわれて論理性を見失うこと、基礎研究や理論を軽視することがあってはならない。私たちは、そう考えています。真に現場の課題解決に資する実践力を備えた教員やスクール・リーダーたる人には、先行研究を踏まえた上で理論化される精緻な実践遂行力と、自己や組織を客観的に見つめることのできる鋭い省察力が欠かせません。したがって、現場でも理論を、理論研究でも実践を常に意識するよう心がけています。たしかに「修士論文」は課しませんが、理論と実践を往還した上で実践研究を行い、その成果を口頭で発表すること、それを踏まえて報告書を作成することは必須です。私たちは、単に現場に出向くだけの甘い集団などではありません。学生も教員も、試されているのです。



山口大学教職大学院のカリキュラム

山口大学教職大学院の教育課程（カリキュラム）について紹介します。

(1)学校現場での課題解決プロジェクト型研究を核に、理論と実践の融合を図る科目開設

本教職大学院では、学校課題を学際的に捉え、課題解決に向けて大学院教員等と協働して取り組む実践研究が基本となります。そこで、学校教育における「実践と理論の融合」を重視した授業科目の開設や配置を行っています。

(2)山口県唯一の教職大学院として、デマンドサイドのニーズに応える科目開設

本教職大学院では、山口県・市町教育委員会等との連携協働や「Win-Win の関係」を重視し、山口県内の学校や地域が抱える教育課題や山口県教育の先進的・革新的取組等を取り扱う授業科目や、教育行政研修を積極的に活用する授業科目を取り入れています。

(3)2コースの「違い」や院生個人の「状況」を大切にす科目開設や運用

本教職大学院では、現職教員院生と学部卒院生の「違い（知識技能、教職実践や経験、課題意識等）」や、院生個人の「状況（学校、居住地、キャリア形成上の目標、職能発達課題等）」をふまえたオーダーメイド型学修を大切にしています。

(4)大学院総がかりで課題解決プロジェクト型研究を支援する科目開設と運用

本教職大学院では、大学院教員（研究者・実務家教員）による T・T の授業、少人数編成に複数教員が関わる授業、横断的・合科的運用を行う授業や院生と全教員による研究会の開設等、「チーム山口大学教職大学院」としての授業開設や運営を行っています。

山口大学教職大学院 教員紹介（自己紹介・担当科目・教職大学院の魅力）

山口大学教職大学院 14 名の専任教員が教職大学院の魅力を紹介します。（50 音順で紹介）

名前	池田 廣司（いけだ ひろし）
自己紹介等	山口県内の国・公立中学校教諭を経て、市教委・県教委勤務。公立中学校長時代にコミュニティ・スクールを立ち上げ、地域とともに伸びていく学校づくりに取り組みました。
担当科目	「学校経営と組織開発」「学外連携・コミュニティ・スクールの理論と実践 A・B」他
教員が考える教職大学院の魅力	今日の学校は、複雑化・多様化した課題を抱えており、学校だけでは解決できない時代になってきています。このため、「地域とともにある学校づくり」が重要となっています。山口大学教職大学院の特色の一つとして、履修する科目名にコミュニティ・スクールが含まれていることがあげられます。教職大学院生とともに、学校経営やコミュニティ・スクールの可能性や魅力について研究できることを楽しみにしています。

名前	板垣 育生 (いたがき いくお)
自己紹介等	元中学校教員(国語科)。市教委・教育事務所・県教委等で教育行政に携わりました。中学校長を退職後、教職大学院で主として学校管理・運営、生徒指導、教育行政等の授業を担当しています。
担当科目	「学校評価と学校改善」「生徒指導の実践と課題」「学校危機管理、リスクマネジメントの理論と実践B」「教育行政インターンシップ」他
教員が考える教職大学院の魅力	大学で専門的研究を積み重ねた教員、教育行政経験の豊富な教員、校長として学校運営を長年実践してきた教員など、多彩な教授陣のチーム・ティーチングのとともに、山口県の今日的な教育課題の解決に向けた「理論と実践が融合」した実践研究に取り組みます。学校教育の改善に貢献できるような資質能力と実践力の向上を目指したカリキュラムが用意されています。
名前	岡崎 智利(おかざき ちとし)
自己紹介等	公立小学校教諭、山口大学教育学部附属光小学校教諭、岩国教育事務所指導主事、教頭、校長を経て教職大学院の教壇に立っています。教師としては、生活科や総合を主にして「子供とともに在る教師」をめざし、管理職としては、キャリア教育やコミュニティ・スクールを基調にした学校経営に取り組んできました。
担当科目	「授業内容構成特論」「授業デザイン総合演習」他
教員が考える教職大学院の魅力	山口県教育を支え推進してきた先生方と大学における専門教育に携わられてきた先生方との協働によって、少人数の院生を指導しています。加えて、大学院と現場小・中・高諸学校及び教育委員会等が連携して、より高度な実践を可能にする教員の育成が図られています。学修の場にあっては、教育実践の未来を志向し、個の知性と教育愛を高めています。また、豊かな同僚性をもった院生たちが、「志をもって万事の源となす」の気概を抱き、新たな教育の創造に向けて切磋琢磨し合っています。こうしたさまざまな「つながり」による教育の高度化こそ、本教職大学院の魅力だと考えています。
名前	栗田 克弘(くりた かつひろ)
自己紹介等	小学校から中学校の授業についての教育方法や授業分析について研究をしています。中学校で理科教師をやっていました。授業は「創造的生もの」で、授業には誰にも共通する原則的な部分と個人のパーソナリティーに依存する部分があり、そこを混同せず教師自身が授業力をつけていくことが大切であると考えています。
担当科目	「授業内容構成特論」「教科カリキュラム開発・授業デザインと評価B」「授業実践高度化演習」他
教員が考える教職大学院の魅力	現在を知るだけでなく将来を見通せる学校教育についての展望と見識を持てるようになることが一番の魅力だと考えます。本を読んで得ただけの役に立たない理屈に依存せず、また豊かな発想のない貧しい実践に満足するのではなく、実践研究を進めていくことが大切です。

名前	佐々木 司 (ささき つかさ)
自己紹介等	小学生以来、常に自分が学んでいる学校の先生になりたいと思ってきました。小中高の先生にはなりませんでしたが、大学の教員になり、“teacher’ s teacher” として生きていることに喜びを感じています。
担当科目	「学校関係法令の適用と課題」「学校評価と学校改善」「教育の制度と政策」「学校経営と組織開発」「教育行財政の制度と課題 A・B」他
教員が考える教職大学院の魅力	山口大学の教職大学院は、いわば大学院版のコミュニティ・スクールです。授業は基本的にオープン、県内各地に大学教員が赴く、外部との連携を推進する……。従来のような時間と空間の境界を超えた学習機会は大きな魅力でしょう。
名前	静屋 智 (しずや さとる)
自己紹介等	小学校教員、県・市教委専門的職員(指導主事)を経て山口大学の教壇に立って3年目になります。学部生の指導とともに、院生と教育実践の在り方、これからの取組の方向性について考えています。
担当科目	「学校危機管理・リスクマネジメントの理論と実践 A」「教育の制度と課題 A・B」「教育行政インターンシップ」他
教員が考える教職大学院の魅力	山口大学教職大学院は、山口大学ならではの取組を大切にすべきだと思っています。山口県や県内市町の教育課題を改善の方向に向けていくためには、それぞれの教員の意識向上とともに、教育行政機関や教育関係機関、校種や地域を越えた学校間や、学校・家庭・地域とのそれぞれの連携・協働が特に重要になります。子供たちの未来のために「連携・協働」する姿勢が山口大学教職大学院の魅力と思っています。
名前	霜川 正幸 (しもかわ まさゆき)
自己紹介等	中学校(社会科)教員、県・市教委専門的職員(指導主事・社会教育主事)を経て山口大学の教壇に立っています。学部教員(教育実践総合センター長)を兼任しながら、院生や学部生たちとの実践研究、協働実践や地域貢献を日々楽しんでいます。
担当科目	「山口県教育の現状と課題」「学外連携・コミュニティ・スクールの理論と実践 A・B」他
教員が考える教職大学院の魅力	私は、山口県唯一の教職大学院は「山口県らしさ」を大切にすべしと考えています。「学外連携・コミュニティ・スクールの理論と実践」や「山口県教育の現状と課題」等の中で、山口県の教育課題に向き合っていきましょう。私は「実践は理論に先行する。理論は実践を科学する。」と思っています。「現場感覚を大切にできる」こと、それが山口大学教職大学院の魅力と感じています。

名前	鷹岡 亮 (たかおかりょう)
自己紹介等	縁もゆかりもなかった山口に住まわせて頂いて 18 年目になりました。すっかり山口弁に違和感がなくなり、都会に出張に行った時には早く山口に戻りたい…と思うようになりました(笑)。のび太くんに勉強を教えてあげるドラえもんを作りたいと思い、はや四半世紀。院生や学部生の頑張りを見ていると、自分自身「研究にしっかり向き合わなければ」と逆に学ばせてもらえます。ありがたいことです。
担当科目	「知識基盤社会における情報活用の理論と実践 A・B」 「授業実践高度化演習」 他
教員が考える教職大学院の魅力	教職大学院の魅力は「半端者の焦り」と「現場で使えるか?という絶対的物差しとの戦い」でしょうか。ストマス院生は、常に既に現場で働いている同期を意識して、2年後には肩を並べる、いや先にでることを目指し焦りながら学べるのが、時間を無駄にせず、より深く学ぶことにつながるのではないかと思います。また、例えば、「その ICT 現場で使えるのか?」という絶対的物差しと常に対峙して「深く考え、先生方の支援を頂きながら何かを創り出すこと」を繰り返し行えることが魅力であると思っています。
名前	田邊 敏明 (たなべ としあき)
自己紹介等	山口大学に赴任して 23 年経ちました。教育心理学と学校臨床心理学を専門としています。従来までメタファを教育や臨床に応用することが研究の中心でしたが、現在では、認知行動療法の研究もしています。スクールカウンセラーの活動にも興味があります。
担当科目	「教育相談・特別支援教育の理論と実践 A・B」 「スクールカウンセリングの実践と課題」 「学校不適応・問題行動等事例研究」 他
教員が考える教職大学院の魅力	山口大学教職大学院の教育実践開発コースでは、学校に週 2 日間通って、まさに学校を体験する中で、自分の課題の達成を省察するという、実践の中で教師力を培っていくという点で、常に高い動機づけが保たれます。教職大学院では、教師という教育活動を、専門的な研究に偏ることもなく、実践のみに埋没することなく、学校との丁度良い距離から、教師の活動を考えることができます。
名前	藤上 真弓 (ふじかみ まゆみ)
自己紹介等	授業が大好きな元小学校教員です。山口大学の教壇に立って 3 年目です。子供たちの学びと育ちを保障するための授業や教育の在り方について模索しています。
担当科目	「教職員研修開発基礎」 「キャリア教育実践演習」 「学級経営開発基礎」 他
教員が考える教職大学院の魅力	理論と実践を往還する中で、自分の教員としての在り方を見つめることができ、学ぶべき方向性を明らかにできる場所です。また、皆で議論しながら、教育現場が抱える課題や教員がキャリア形成を図っていく上での課題等について、解決の糸口を見いだすことができます。

名前	前田 昌平 (まえだ しょうへい)
自己紹介等	小学校教諭、市教委(指導主事・副参事)、県教育庁教職員課(管理主事・主査)、小学校教頭、校長を経て本大学院の仕事に従事させていただいております。「ほっとけんしゅうしつ」にて「よろず教職相談」の仕事を経験させていただきました。
担当科目	「授業技術の理論と実践」「教科カリキュラム開発、授業デザインと評価A」他
教員が考える教職大学院の魅力	理論を学び、大学教員の価値付けをもらいながら「現地実習」にじっくりと取り組むことができる。このことが教職大学院の魅力であり、この「現地実習」の充実が現地での人間関係を含め、教育課題への対応力を磨いていく鍵を握っていると思っています。
名前	前原 隆志 (まえはら たかし)
自己紹介等	中学校(社会科・音楽科)教員、県教委指導主事、主査を経て山口大学に勤務しています。専門分野は、学校運営、学校評価、授業改善、学習指導、学力向上で、学校運営や授業改善などを中心に、学校がチームとして動くためのしくみについて研究しています。先生の力を結集し、学校全体が一つのチームとなって、課題を解決し、さらに向上するためのシステムづくりをめざしています。
担当科目	「教職員研修開発実践演習」「カリキュラム開発の理論と実践B」他
教員が考える教職大学院の魅力	講義では、学校における教育課程(カリキュラム)の作成や教員研修の進め方について、学校現場の様子を紹介しながら、一緒に考えます。また、討論や小論文作成、模擬授業をしながら、学部卒業の学生の皆さんに学校現場で求められる力が身に付くよう、教員採用に向けた支援もしています。
名前	松岡 敬興 (まつおか よしき)
自己紹介等	いじめ問題の未然予防に関する取組を進めています。道徳と特別活動とを連動させた授業プログラムを開発し、学校現場での実証研究に取り組んでいます。学びに終点なし、日々挑戦する気概で!
担当科目	「道徳教育の理論と実践A・B」「特別活動の実践と課題」「学級経営の理論と実践」「生徒指導の実践と課題」他
教員が考える教職大学院の魅力	現職教員を対象に、教育現場の中核を担い、現場レベルの改善や革新を牽引できる力量を育てています。指導者は、「大きな耳、小さな口、優しい目」の構えで、院生とは「卒啄」の関係性を心がけています。理論と実務の架橋を実現すべく、双方向・多方向に行われる討論・質疑応答による実践的な授業が、ダイナミックに展開されています。
名前	和泉 研二 (わいずみ けんじ)
自己紹介等	東北大学理学部出身の化学の研究者(博士(工学))です。山口大学に来て20年程になりますが、その前は愛知県岡崎市にある国立共同研究機構分子科学研究所にいました。附属小学校の校長も経験しましたが、おそらくは、現在の全国の教職大学院の教員の中では、かなり異質な経歴を持った変わり種です。
担当科目	「山口県教育の現状と課題」「授業内容構成特論」他
教員が考える教職大学院の魅力	「教員は現場で育つ」と確信しています。山口大学の教職大学院は、県や各市町の教育委員会とも連携しながら学校現場に学生を送り出す「地域拠点校方式」を採用しています。このシステムこそ、本学教職大学院の大きな魅力と言えるでしょう。

教職大学院の実習の特徴とねらいとは

(1)学校実習でのねらい、期間、内容

学校実習においては学校現場における教育活動や教員業務を総合的に体験し、その実践・考察の中で教員としての資質能力を高めるものであり、1年前期から2年前期にかけて実習科目として3科目開設しています。院生は一定程度の長期期間にわたり教育実習校に滞在し、各教科領域や個別の教育指導にとどまらず、全ての教育活動や教員業務を体験し、学校の教職員集団の一員として従事することになります。学校実習をとおして、組織体としての学校のあり方を学び、マネジメントサイクルを実体験し、一教員としての役割と責任、同僚性、協調性や連帯感を学ぶことになります。

また、学校実習は、実習校教員の実践の参観、教員等からの指導助言や自らの教職実践と省察等を重ね、実践と理論をつなぐ場、それぞれが取り組む課題研究に関連する比較研究、調査研究、情報収集や研究協議等を行う研究の場でもあります。

(2)学校実習にかかる4種類の連携協力校

本教職大学院には、課題研究や教育実習等の実施にあたり4種類の連携協力校があります。学校経営コース院生の現任校が「学校課題研究校Ⅰ」、教育実践開発コース院生が主に学校実習を行う学校が「学校課題研究校Ⅱ」、各種研修行事等の活用や大学教員等から日常的に指導助言が受けられる学部附属学校が「先進的課題研究校」、授業研究、学校課題探求やコミュニティ・スクール等先進研究の場となる公立校が「教育実践協力校」です。本教職大学院では、大学と教育委員会、これらの連携協力校を効果的にリンクさせ、カリキュラムを充実深化させていきます。

(3)教育実践開発コースの学校実習の特徴的な取組

山口大学教職大学院の教育実践開発コースでは、4月から毎週2日、終日の学校実習が設定されています。入学前面接で、研究テーマや保有免許教科などを確認し、実習校として相応しい学校を山口市教育委員会と連携して選定します。4月の早い段階から学校実習に参加することで、新学年の組織づくりや運営など学校現場の教員としての指導の様子を、通年で観察・体験することができます。また、朝のあいさつ運動に始まり、放課後の部活動まで、学校の一日を体験することで、実際に教職に就いた際の楽しさや課題も、肌で実感することができます。

実際に授業を実施するのは、1年生前期と後期、2年生前期で、それぞれ5教材程度です。指導案作成に当たっては、例えば、火曜日に実習校の指導教員とともに指導案を検討し、水曜日に実地授業をするなどとしています。授業後には、実習校の指導教員と大学教員と共に振り返りを行い、授業改善のポイントをつかみます。このように、年間を通じて授業準備と授業実践を一定のサイクルで実施することで、授業力が確実に高まります。

【編集後記】

山口大学教職大学院ニュースレターの記念すべき創刊号編集を担当するという事で、非常に重い責任を感じるとともに、みなさんに山大教職大学院の理念や特徴、そして目指すべき姿を知っていただける大きなチャンスだとも感じました。今回の編集作業を通して、教職大学院の先生方が目指しておられることや、我々に求められていることなどについても再確認することができました。

今後も、教職大学院の授業や院生の学びの様子についてお知らせしていきたいと思っております。教育現場で出会う子供たち、そして山口県教育の更なる発展のために、全力で突き進む私たちの学びの姿を少しでも多くの人々に知っていただけたら幸いです。

(平成28年初秋 編集部一同)